

大友吉統重臣
よしむね

田原紹忍親賢について

矢島嗣久

田原紹忍親賢は奈多八幡宮宮司鑑基の次男として生まれ、豊後国東武蔵の田原親資（親邦）の養子となった。

慶長五年の別府石垣原合戦には主君大友吉統（義統）を補佐して敗れ、のち西軍側曰杵太田一吉勢に対して東軍側岡領中川方として参加し佐賀関合戦で戦死した。

一 出生と生い立ち

田原紹忍親賢は奈多宮宮司（杵築市東北部）の奈多鑑基の次男として生まれた。母は田北親員の娘である。

奈多鑑基は国東郡安岐郷奈多八幡大宮司で武将でもあり、豊後大友氏の家臣として社奉行の地位にあった。

鑑基の長男は政基といい、父と同様に豊後大友氏の家臣である。

親賢の母方の祖父田北親員は豊後大友氏の庶家にあた

り、直入郡田北村（直入郡直入町）を本領とした同郡朽網郷松牟礼城主（直入町中央北部）である。

親員は享禄元年（一五二八）から天文九年（一五四〇）まで宗麟の父義鑑の加判衆を勤めた。同年七月に死去。加判衆とは公文書に連判をする人で家老職にあたる。

親賢は天文九年（一五四〇）頃、豊後大友氏家臣の国東郡武蔵郷今市城主（現国東郡武蔵町）の田原親資（親邦）の養嫡子となって田原親資を襲名し、俗名を親賢と名乗った。

養父田原親資は豊後大友氏の家臣で、国東郡武蔵郷今市城主（現武蔵中学校付近）である。大友田原氏の庶流で武蔵田原氏を称する。宗麟の父大友義鑑に重用され天文年間（一五三二―一五五五）に社奉行、筑後三潯郡代（福岡県南西部）・豊前上毛郡代を勤めた。国東郡代、

国東郡安岐郷・武蔵郷の政所職にも就任していた。

政所とは政務・庶務をつかさどる所をいう。また、鎌倉・室町幕府の財政及び一部の民事訴訟をつかさどる機関のことをいった。

天文十九年（一五五〇）二月の「二階崩れの変」の際、親資は殿中（大友館、現大分市上野丘）にあり、津久見美作守・田口蔵人佐らと戦い、負傷し、この変で重傷を負った義鎮（のち宗麟）の父大友義鑑（豊後大友氏二十代）は二日後に死去した。享年四十九歳。

その結果、義鑑の嫡子大友義鎮が豊後大友氏二十一代の家督を継いだ。

天文十九年大友義鎮の命令によって親賢は叔父田北鑑生とともに筑後を征服した。

田北鑑生は速見郡山香郷日差城主（現速見郡山香町西部）で田原親員の子である。

鑑生は天文十九年二月から永禄四年（一五六一）三月ころまで義鎮の加判衆を勤めた。同年十一月に死去する。田北鑑生と親賢の母とは兄妹にあたる。

親賢の養父田原親資は天文二十二年（一五五三）に死

三 田原紹忍

永禄五年（一五六二）五月、大友義鎮は臼杵莊丹生島（現臼杵市）に築城し、ここに移った。ついで入道（剃髪）し宗麟と号し、田原近江守親賢も入道して紹忍と称した。

永禄八年（一五六五）七月、毛利の入により、立花陣にて奈多政基（鑑基の嫡子、親賢の兄）が戦死し、その子鎮基が奈多家の家督を継いだ。

大友親家は宗麟の二男で永禄四年（一五六一）に府内（現大分市）の大友館に生まれた。母は奈多鑑基の女（親賢の妹）である。従って、親賢とは伯父、甥の關係にあたる。一時、親賢の養子にもなっていた。

親家は、文禄二年（一五九三）義統の国除後、筑後の立花宗茂のもとにあったが、慶長十四年（一六〇九）に小倉藩主細川三斎（忠興、藤孝の嫡子）に仕え、利根川道孝と名乗った。のち、子孫は松野氏と称した。

親賢には男の子がなかったので永禄十一年（一五六八）に公家柳原氏から七歳の養子をもらい親虎と名付けた。永禄五年（一五六二）頃の生まれである。

去した。

二 大友宗麟との関わり

田原親賢の妹（一説には姉ともいう）、奈多鑑基の娘が大友義鎮（宗麟）の正室（正妻）となっている。

弘治三年（一五五七）六月から天正九年（一五八一）まで、親賢は豊前妙見岳城督（現宇佐郡院内町北部、標高四四四メートル）として宇佐・上毛・下毛郡を拠点に豊前経営にあたり、成功した。

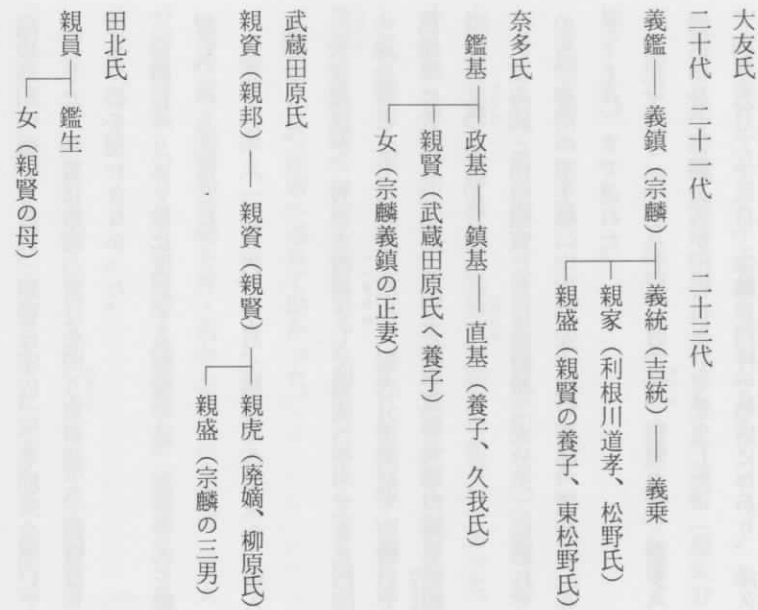
武蔵今市城は永禄年間（一五五八〜七〇）、大友義鎮の重臣吉弘鑑理が居城した。鑑理は左近大夫と称し、武勇にすぐれた武将であった。鑑理は、のち石垣原合戦で活躍した吉弘加兵衛統幸の祖父にあたる。

永禄元年（一五五八）閏六月、大友義鎮の嫡子義統が生まれた。

従って、親賢は大友義鎮とは義兄弟、義鎮の嫡子義統とは伯（叔）父と甥の關係にあたる。

親賢は大友義鎮（宗麟）・義統父子に仕え、親族及び側近として影響力をもっていた。

系 図



大友親盛は宗麟の三男で、永禄十年（一五六七）に臼杵丹生島城で生まれた。母は大友親家と同様に奈多鑑基の女である。天正九年（一五八一）に田原紹忍親賢の養子となって家督を譲られ、与兵衛尉と称し豊前妙見岳城（宇佐郡院内町北部）に在城した。

文禄二年（一五九三）、親盛は吉統の国除後、豊前小倉の細川氏に仕官して松野半斎（東松野氏）と称した。

親賢は民部大輔と名乗り、永禄五年（一五六二）には尾張守、永禄八年（一五六五）には近江守となり、永禄十二年（一五六九）から天正六年（一五七八）まで宗麟・義統の加判衆でもあった。

天正元年（一五七三）十二月、宗麟は家督を嫡子義統（豊後大友氏二十二代）に譲った。

天正五年（一五七七）、日向伊東義祐（日向郡於郡領主）が薩摩の島津氏から攻撃を受け、大友宗麟に救いを求めた。

親虎が天正五年四月に臼杵で洗礼を受けたため、田原親賢は養子親虎を廃嫡除籍して追放した。

翌天正六年（一五七八）、宗麟が島津征伐を行い、日

この年、奈多八幡の社地及び領地も没収されたため京都我家出身の養子万福丸（直基）が京都に帰郷した。

五 豊後除国

文禄二年（一五九三）一月、大友吉統（義統）は朝鮮の役の際、敵前逃亡の失敗をしてしまった。

同年五月、豊臣秀吉が吉統を罰し、豊後国を没収して蔵入分（秀吉の直轄地）とし、吉統の身柄を毛利輝元に預け、吉統の嫡子義乗は五百人扶持とし加藤清正に従わせる。田原紹忍の所領も没収された。

吉統は一年ばかり山口に幽閉された後、文禄三年九月には水戸の佐竹義宣のもとに移された。

文禄三年（一五九四）二月頃、秀吉が豊後を諸将に分ち、中川秀成には直入郡岡城（現竹田市）七万石を宛てがった。

大友家の旧臣で、宗麟・吉統の筆頭家老であった田原紹忍親賢と宗像掃部鎮統が岡藩中川家の客分与力（被官の武士）となっていた。吉統から豊後国を取り上げた秀吉が、朝鮮の役とき、留守を守っていた田原紹忍親賢

向の耳川の戦いで敗れ、親賢は宇佐、下毛郡衆を率いて撤退した。親賢に敗戦の責任を問う声が強く、親賢はしばらく姿を現わさなかった。

宗麟はキリスト教に反対する親賢の妹、奈多夫人を離縁し、のち入信した。

天正十四年（一五八六）十月、島津軍が豊後への侵入を開始した。

大友義統が、秀吉の救援として豊後へやってきた四国の連合軍とともに豊後戸次川（現大分市南部）の戦いで島津軍に大敗し、土佐の国主長宗我部元親の嫡男信親（二十二歳）が戦死した。

大友義統と田原親賢たちは高崎城（大分市）に逃れてのち、豊前の竜王城（宇佐郡安院町西部、標高三一五メートル）まで逃れた。

天正十五年（一五八七）二月ころ、親賢の妹、奈多八幡宮出身の宗麟夫人が臼杵において死去した。

同年五月二十三日、宗麟が臼杵で熱病にかかり、津久見に帰って死去した。享年五十八歳。同年八月、奈多政基の嫡子鎮基が奈多にて死去した。

には岡領柏原松本村（現直入郡荻町、中央南部）二千九百石、宗像掃部鎮統には律原郷（現直入郡荻町馬場内、中央北部）千八百五十石余を特別に与えていた。

文禄三年八月、岡藩中川氏は秀吉から今津留（現大分市）四百六十二石余を拝領、同所勢家の沖ノ浜を船着き場とした。

文禄五年（一五九六）、十月二十七日から慶長に改元。閏七月十二日、豊後地方一帯で大津波が起り、当時、柴山岡賀重祐と養子の勘兵衛重成が岡藩の船奉行であった、沖ノ浜（現大分市勢家、西日本電線工場の沖合）が海没した。岡藩（現竹田市、藩主中川氏）船奉行柴山勘兵衛重成とその妻らは沖ノ浜にあった居宅の屋根を突き破って脱出し、今津留へ逃れて助かった。

大津波のあと、沖ノ浜はすべて海没してしまっていた。海没後、岡藩船付場を沖ノ浜から萩原村今津留（現大分市今津留、OBSと市営陸上競技場との中間地点）に移した。

慶長二年（一五九七）頃、太田一吉政信が豊後臼杵藩三万五千石（預かり地二万石とも）に封ぜられ、領内の

検地を実施した。

慶長三年（一五九八）八月、豊臣秀吉が死去する。享年六十三歳。その結果、十二月までに朝鮮在陣の日本軍の撤退を完了させた。

六 石垣原合戦

秀吉の死後、徳川家康と石田三成との対立が激しくなり、慶長五年（一六〇〇）九月、関ヶ原の戦いとなった。慶長四年に許されて京都にいた大友吉統（義統）は西軍方の毛利輝元（元就の孫）から兵船と軍兵を与えられて周防（現山口県東部）の大島から上関を経て豊後へ向かい、九月九日に別府浜脇に上陸して、立石（別府市観海寺西北の南立石）に陣をしいた。吉統は竹田（岡藩）の中川氏に仕えていた田原紹忍親賢・宗像掃部鎮統及びその他旧臣たちを招集した。本陣は立石村古屋園（現別府市南立石本町）に置き、大友吉統を田原紹忍親賢が補佐し、右翼は坂本村（杉ノ井ホテル付近）に吉弘加兵衛統幸が、左翼は御堂ヶ原（堀田付近）に宗像掃部鎮統が陣をしいた。

大友軍に参加した。黒田孝高はこれを見て、岡藩中川氏の西軍への加担を徳川家康に報告することになった。中川秀成は使者をもって家康に弁解したが誤解がとけず、家康は肥後の加藤清正に中川氏を討つよう命じた。

清正は「虚実を正してのち、兵をおこすべし」と家康に報告して、宇土（熊本県中部）の小西行長の攻略に向かった。中川秀成も宇土まで使者を出し、清正に人質を送って弁明した。秀成は更に東軍家康側に誠意を表わすため、西軍石田三成方の臼杵城太田一吉政信を討つことを決め、自ら出陣した。石垣原の合戦後、田原親賢は岡藩の飛び地領大分郡今津留（現大分市）の定詰（常駐場所）で船奉行をしていた柴山勘兵衛重成のもとに逃れていた。

中川秀成は柴山らに臼杵城侵攻を命令したので、柴山両賀、勘兵衛（養子）父子は軍勢をひきいて小佐井村（現大分市JR坂ノ市駅南側）を焼き、大坂から船で戻ってきた家老中川平右衛門長祐らの軍勢と合流した。十月三日、中川勢は佐賀関で臼杵方太田一吉勢と戦った。この佐賀関の戦いで、田原紹忍親賢は鉄砲にあたって戦死

木付城を救援後、細川方の松井康之・有吉立行の軍勢とともに別府へ進撃した黒田方の井上九郎右衛門之房らの軍勢は角殿山（現ルミエールの丘）に、細川軍は実相寺山に陣をとり、南西側立石砦の大友方と対峙した。九月十三日に戦いが開始され、最初は太田一吉勢が優勢であったが、数にまさる黒田、細川連合軍が勝利をおさめた。

大友方は吉弘加兵衛統幸、宗像掃部鎮統らをはじめ、多くの武将や雑兵が討ち死にした。

敗戦を知って大友吉統は自刃しようとしたが田原紹忍親賢に止められた。吉統はやがて剃髪・墨衣の姿になり、母里太兵衛を通じて黒田如水孝高に降参した。ちなみに、関ヶ原の戦いは九月十五日に決着がつき、東軍の徳川家康が勝利をおさめた。

吉統は黒田如水の中津城から江戸に送られ、家康から出羽秋田の秋田実季に預けられ幽閉された。

七 佐賀関合戦

岡藩中川氏の客分与力となっていた田原紹忍親賢と宗像掃部鎮統らは中川家の旗印を盗み出して石垣原合戦の

した。中川軍の戦死者は家老職中川平右衛門、客分与力田原紹忍親賢、船奉行柴山両賀重祐（勘兵衛重成の養父）ら二百三十余人、負傷者は二百余にのぼった。臼杵城の太田一吉政信は、関ヶ原での西軍石田三成方の敗北を知り、城を落ちのびた。

徳川家康は岡藩中川氏の重臣が佐賀関の戦いでことごとく戦死したのを知り、秀成を信用した。中川家は竹田市の岡城で明治維新まで存続することになった。

田原紹忍親賢の墓は佐賀関町上浦町入り口の路傍にあったが、精錬所の住宅建設のさい取り除かれた。法名を真土院本誓紹忍居士という。

引用参考文献

大友宗麟を支えた田原紹忍とその周辺 水口忠孝

大分県の歴史 渡辺澄夫著 山川出版社

二豊小藩物語 上巻 大分合同新聞社

日本城郭全集 十三 人物往来社

大分の歴史年表 渡辺澄夫編 大分合同新聞社

戦国人名事典 阿部 猛、西村圭子編

戦国大名家臣団事典 西国編 新人物往来社